

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01481

研究課題名(和文) 近現代日本の国際関係思想の形成 「未知との出会い」としての国際文化交渉

研究課題名(英文) Making of International Thought in modern Japan: International Cultural Relations as "Encounter with the unknown"

研究代表者

芝崎 厚士 (Shibasaki, Atsushi)

駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授

研究者番号：10345069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)： 「未知との出会い」としての国際文化交渉を対象とした本研究は、次の3つの成果を達成した。

第一に、単著『国際文化交流と近現代日本』の刊行によって歴史実証研究を達成した。第二に、「ボブ・ディランという音」をはじめとするいくつかの理論的・思想的・哲学的考察を発表した。第三に、第一の実証研究、第二の理論的・思想的・哲学的研究の成果を踏まえて、「Are you experienced?体験としての音楽」をはじめとする「体験」を学際的に分析したより発展的な研究を進めた。

以上の3つの成果によって、当該領域の研究の基礎を確立し、今後の方向性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の客観性や科学性を重視する社会科学・人文科学が見落としがちであった、主観的な現象の受容と理解である「体験」に着眼して、人間と現象との「未知との出会い」の現場において何が起きたかを、学際的に検証する分析モデルを確立したことに最大の学術的意義を持つ。

また、人々一人一人の千差万別の「未知との出会い」のそれぞれが意味を持ち、それが一人一人の人間の人間観、世界観を形成し、さらにそれらの人々が出会うことで「共感の連鎖」がグローバルに発生していくことの重要性がこれによって明らかになり、この世界をよりよく構想し、実践していく基盤となる可能性を提起したことが、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要(英文)： This research, which focuses on international cultural interaction as an "encounter with the unknown," has achieved the following three outcomes.

First, this research achieved empirical historical research through the publication of a single book, International Cultural Exchange and Modern Japan. Second, it published several theoretical, ideological, and philosophical discussions, including "The Sound of Bob Dylan." Third, based on the results of the first empirical research and the second theoretical, ideological, and philosophical research, it has attained more advanced research that interdisciplinarily analyzes "experience" by publishing the paper "Are you experienced? Music as Experience."

Through the above three achievements, we were able to establish the foundation of research in this area and indicate the future direction.

研究分野：国際関係論

キーワード：国際文化論 グローバル文化論 国際関係と音楽 グローバル関係論 国際関係思想 グローバル関係思想 国際文化交流 グローバル文化交流

1. 研究開始当初の背景

「国際関係」をめぐる思想を研究する、国際関係思想研究は、21世紀になって本格的に進展してきた、新しい研究領域である。しかし、その研究対象は主に、英語圏の国際関係論における大家、あるいは政治家たちが多くを占めてきた。またその研究方法は主に、古典的な思想史研究が行ってきた、テキストとの対話、史実の収集と検証によるものであった。その結果として、こうした国際関係思想研究の多くは、欧米の英語圏における国際関係をめぐる思想が持ってきた知的ヘゲモニーを後追いし追認するような成果を伴うことが多かったし、またそれらの思想の表現とされるテキストの権威をいっそう高めることになることも多かった。

もちろん、同じく21世紀前半において、ポストモダニズム、ポストコロニアリズムの観点から、欧米英語圏が国際関係および国際関係思想において持ってきた権威に挑戦し、脱構築・再構築しようとする動きは徐々に盛んになってきた。しかし、これらの研究はちょうど合わせ鏡のように、非西洋・非欧米の思想家やテキストを対抗馬として立てることによって、それらの権威やテキストの「聖性」を占めようとするような傾向があった。対象を真逆にしながらも、方法においては基本的に変わることがなかったのである。

もちろん、グローバル・ヒストリーや人類史といった視座を踏まえて歴史自体を再構成し、多文化・多言語の多様性の中に学知を開こうとする試みには意義がある。しかし西洋・非西洋に関係なく、「国際関係」、ひいてはこの「世界」全体がどのようなものであるか、その構造と過程について思いをめぐらせる「思想」がどのようなものであるかは、万人共通に抱えてきた問いであり、いわゆる「大家」だけに限られないであろう。第二に、その「思想」は、単にテキストを読み、資料を収集して事実を実証するだけで果して再構築できるであろうか、人間は日常の様々な事象との接触から自己の世界観・人間観を確立するものであって、その接触という「体験」を総体的に踏まえた思想を把握が必要なのではないであろうか。

以上のような問いから、主に日本を対象としつつも必要に応じて領域を拡大しつつ、「体験」を含めたすべての人間の世界観・人間観形成としての「国際関係」をめぐる思想を学際的に解明する必要が生じたのであった。

2. 研究の目的

本研究は、近現代日本における「国際関係」をめぐる思想がどのように生成し、形成され、展開してきたかを、従来の思想史、国際関係思想史とは一線を画した、「未知との出会い」としての国際文化交渉という新たな視点と方法から、国際比較の視点を取り入れつつ、学際的かつ総合的に俯瞰する研究である。

具体的には、1「未知との出会い」としての国際文化交渉という分析視座を確立すること、2文献資料や聞き取り調査によって坂本義和、緒方貞子、入江昭などといった国際的に学術ないし実践活動に関与してきた研究対象の「国際関係」をめぐる思想

の形成過程とその構造を解明すること、31の分析視座、2の具体的な事例研究の双方を、国際比較の視点からその妥当性、普遍性、固有性を解明し、グローバルな規模での「国際関係」をめぐる比較研究の素地を切り開くこと、である。

3. 研究の方法

研究の方法は、(1)具体的な対象の研究から、その思想と行動を別出する手法(2)(1)と連動しつつ、思想と行動を上述の観点から再構成するための手法の確立、という2つを柱としている。

(1)第一の点については「国際文化交渉論」「未知との出会い」論を中心に、先行研究である平野健一郎、柳父章に関する論考を検討していくことで方法論的考察を深めた。加えて、アントニオ・ネグリ論、ボブ・ディラン論、日本の国際政治学の将来に関する諸論考によって、個別具体的な研究の中で、そのアプローチの有効性と妥当性を検証していった。さらにその背景となる理論的・哲学的課題についても、別の科研費での共同研究である近代日本における新カント派の意義、時政学の構築、グローバル関係論の時間的・空間論的基礎づけなどに参加していくことによって、その成果を本研究に還元していった。

(2)第二の点については、『国際文化交流と近現代日本』に収録された、戦後前から戦後、特にこれまで看過されてきた、70年代以降の国際文化交流を中心とした、多文化共生を目指した市民の公共的な活動の歴史を、取材を重ね資料を収集することによって初めて解明した。こうした実証的な研究と、様々な分野における理論的・哲学的考察を総合してゆく学際的手法を採用した。

4. 研究成果

研究成果として、主に以下の点をあげることができる。(1)戦前から現在までの日本の国際文化交渉史の通史的理解の確立、および70年代末以降の市民によるトランスナショナルな交流の構築過程の歴史的解明とその意義の検証。(2)「体験」「未知との出会い」を核とする国際関係思想・グローバル関係思想の構築のための理論的・哲学的考察(3)「体験」そのものが人間にとって持つ根源的な意味に関する、ペダゴギーをめぐる参与観察的考察(4)「体験」「未知との出会い」を根源的に規定する、世界観・人間観・時間観・空間間の哲学的な基礎づけに関する考察

(1)戦前から現在までの日本の国際文化交渉史の通史的理解の確立、および70年代末以降の市民によるトランスナショナルな交流の構築過程の歴史的解明とその意義の検証。

単著『国際文化交流と近現代日本』(有信堂高文社、2020年)では、戦前から現在までの日本の国際文化関係の形成・展開を通観すると共に、1930年代においてその特質を象徴する日米学生会議の形成過程を検証し、つづいて1988-1997年に開催された箱根会議とその前史としての1979年からのHIF(函館国際交流センター)の活動、そして箱根会議から生み出されていったカタリスト論の形成と展開を実証的に検討し、さらにこれらの歴史的展開を駆動していったと思われる「未知との出会い」に対する理論的考察と、歴史的展開の背後にある国民国家をめぐる思想的転換の様相を解明した。

以上によって、本研究が中核的に取り扱う、近現代日本における国際関係をめぐる思想と行動を「未知との出会い」の観点から実証的かつ思想的に明らかにし、その意義を示すことができた。

(2)「体験」「未知との出会い」を核とする国際関係思想・グローバル関係思想の構築のための理論的・哲学的考察

前掲『国際文化交流と近現代日本』においてもこの点については柳父章論を中心に展開していたが、編著『国際政治学は終わったのか』において国際文化交渉論を、2010年代前半における世界の国際関係論が抱える課題に対してどの程度有効であるかを問いかけて、さらに発展させることができた。この方向性に対する補助線として、バーゼル大学での研究報告をもとにした英語論文、および2018年2月に行ったアントニオ・ネグリとの対談における考察が大きな示唆となった。

こうした理論的・哲学的考察を踏まえて発表した「日本の国際関係研究における「固有の課題」と「共通の方法」」では、当時の最先端の日本・世界の国際関係学の現状と課題に関する種々の議論を総括し、それらが抱えているアポリアを指摘した上で、グローバル・ヒストリー研究の知見を取り入れつつ、「体験」「未知との出会い」から今後の国際関係研究のあり方を提唱することができた。

(3)「体験」そのものが人間にとって持つ根源的な意味に関する、理論的ないしペダゴギーをめぐる参与観察的考察

「未知との出会い」という「体験」が人間にとって根源的に持ちうる意味が何かを考察することもまた、本研究の重要な目標であった。これに対しては第一に「ボブ・ディランという音」によって、ボブ・ディランの「音」を体験するということが持つ根源的な意味そのものを考察することで、解釈や説明に回収されない、理解や共感にことの本質があること、そしてそのことがいかに通常の学問・科学的研究からは欠落しがちであるかを解明することができた。このことは、同論文に関する研究会・学会でのワークショップを通して明らかになることができた。こうした考察は、(1)(2)にあげた諸論文にも反映されている。

同時に、「メティエとペダゴギーの往還錬成」論文や「Are you experienced?体験としての音楽」といった、実際の教育の現場における「体験」が持つ意味を、参与観察的な状況のなかで客観的に考察し、分析を示すことができた。「ボブ・ディランという音」における理論的ないし方法論的な考察を、実際の現場において精錬することができた。

(4)「体験」「未知との出会い」を根源的に規定する、世界観・人間観・時間観・空間間の哲学的な基礎づけに関する考察

共著『時政学への挑戦』および2022年6月刊行の共著『グローバル化政治のゆくえ』で示すように、「体験」「未知との出会い」から「国際関係」をめぐる思想と行動を解明する上での大前提として、そもそもわれわれが存在し、さまざまな知覚にさらされ、さまざまな思考を展開しているこの世界の存立基盤がどのようなものかを明確にする必要がある。

これらの考察は、時政学、新カント派などそれぞれ別の科研の共同研究や、当該研究代表者が新たに開始したグローバル関係の時間論的基礎づけに関する基盤研究などとさまざまな意味で有機的に結合し、発展しつつある。そうした有機的な発展の基礎となる考察を、上記の2共著で発表することができた。さらに、国際日本文化研究センターでの柳澤健に関する共同研究では、これらで得られた知見をもう一度、学際的な歴史実証研究の中で応用していく機会を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 芝崎 厚士	4. 巻 2020
2. 論文標題 日本の国際関係研究における「固有の課題」と「共有の方法」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 200_101 ~ 200_118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11375/kokusaiseiji.200_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 芝崎厚士	4. 巻 28
2. 論文標題 メティエとベダゴギーの往還錬成『近現代日本と国際文化交流 グローバル文化交流研究のために』（有信堂高文社、2020年）をめぐるオンライン・ゼミの試み（2020.5.9-2020.7.25）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Global Media Studies	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Atsushi Shibasaki	4. 巻 118
2. 論文標題 A Conversation with Antonio Negri: Empire before and after, Multitude, Passion and Emotion, Bob Dylan and Michael Moore, and more.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GLOBAL EUROPE Basel Papers on Europe in a Global Perspective	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 芝崎厚士	4. 巻 25
2. 論文標題 近現代日本におけるグローバル文化交流の胎動 実践としての「国際交流のつどい」と思想としてのカタリスト論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of global media studies	6. 最初と最後の頁 17-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 芝崎厚士	4. 巻 51
2. 論文標題 「ボブ・ディランという音」と平和学 ポール・ウィリアムズのディラン論を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平和研究	6. 最初と最後の頁 37-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝崎厚士	4. 巻 200
2. 論文標題 日本の国際関係研究における「固有の課題」と「共有の方法」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 101-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11375/kokusaiseiji.200_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Shibasaki	4. 巻 23
2. 論文標題 Towards Global Multitude and Assembly: An Analysis of the Works of Antonio Negri and Michael Hardt	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Global Media Studies	6. 最初と最後の頁 31-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Shibasaki	4. 巻 24
2. 論文標題 Meine akademischen Erinnerungen, 1990-2018 (Erster Teil)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Global Media Studies	6. 最初と最後の頁 33-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 芝崎厚士
2. 発表標題 「文化」と「文化」の出会い グローバル交流研究のための覚書
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Atsushi Shibasaki
2. 発表標題 Cultural diplomacy is (also) what states make of it: case of Japan, theoretical / philosophical perspective from the study of global cultural relations
3. 学会等名 SYMPOSIUM: CULTURE AND DIPLOMACY IN THE CHANGING WORLD: ITS RELATIONS, VALUES AND PRACTICES
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 芝崎厚士
2. 発表標題 報告3 「『ボブ・ディランという音』と平和学 ポール・ウィリアムズのディラン論を中心に」
3. 学会等名 日本平和学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芝崎厚士
2. 発表標題 終わりは、はじまり オルター国際政治学の構想と日本の国際政治学
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 芝崎厚士	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有信堂高文社	5. 総ページ数 300
3. 書名 国際文化交流と近現代日本	

1. 著者名 高橋 良輔、山崎 望	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 時政学への挑戦	

1. 著者名 芝崎厚士	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有信堂高文社	5. 総ページ数 300
3. 書名 国際文化交流と近現代日本	

1. 著者名 葛谷 彩、芝崎 厚士	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 228
3. 書名 「国際政治学」は終わったのか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------